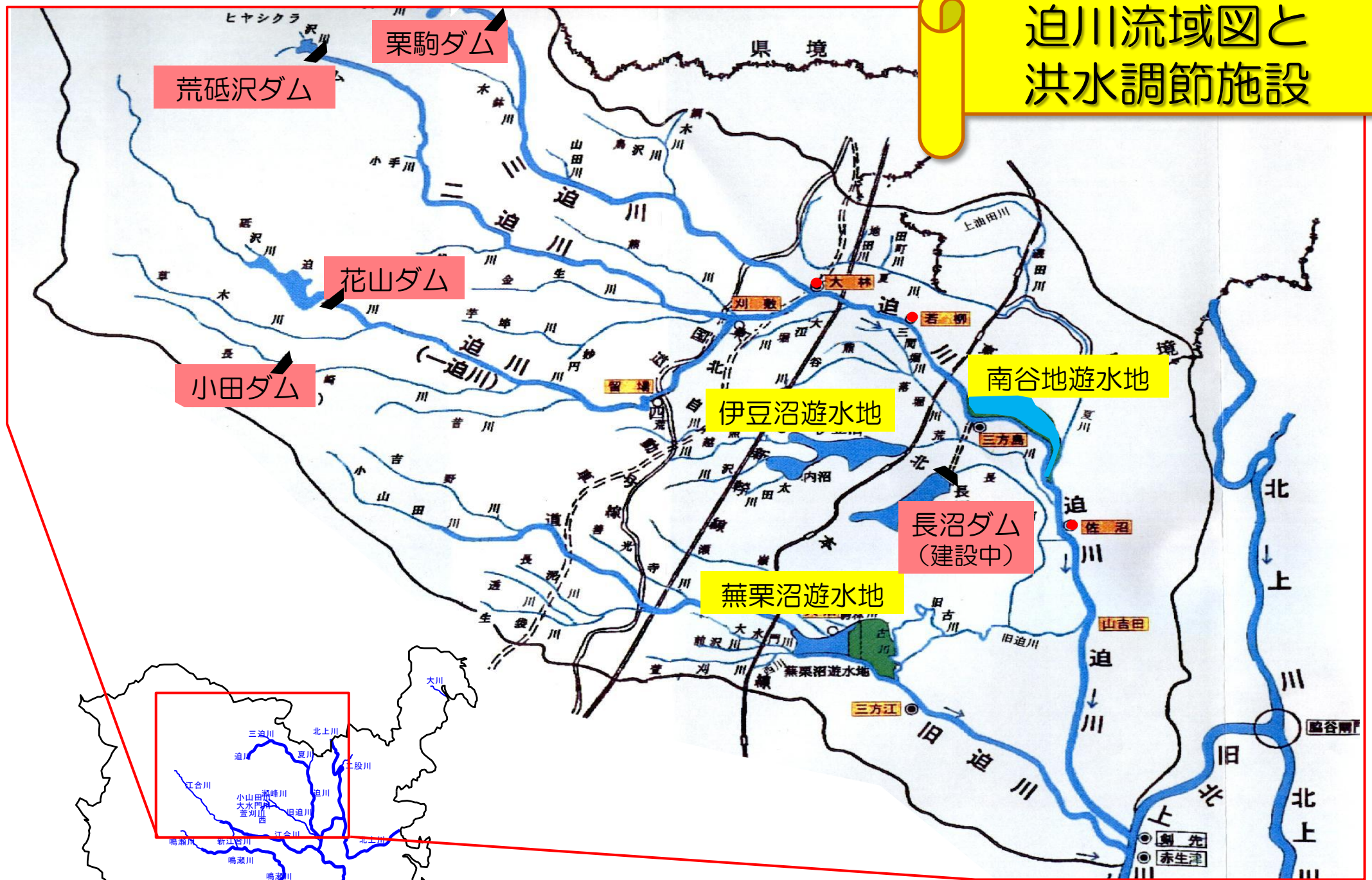


迫川は、栗駒山を源に発し、栗原市から登米市へと流れ、旧北上川に合流する宮城県屈指の大河川です。豊かな水量は、県内有数の穀倉地帯を支える半面、幾度となく水害を経験しており、古くは藩政時代から治水事業が行われてきました。

昭和7年に、県が初めて治水計画の基に大規模な迫川のショートカット工事に着手してから、今年で80年を迎えました。



迫川流域では、全国に先駆けてダムや遊水地といった洪水調節施設を積極的に整備するなど、総合的な治水対策を進めてきました。

迫川で行ってきた治水事業は、みやぎの河川改修の歴史そのものです。洪水被害を防止するために、県が長きにわたり実施してきた治水対策の成果を、ぜひご覧ください。

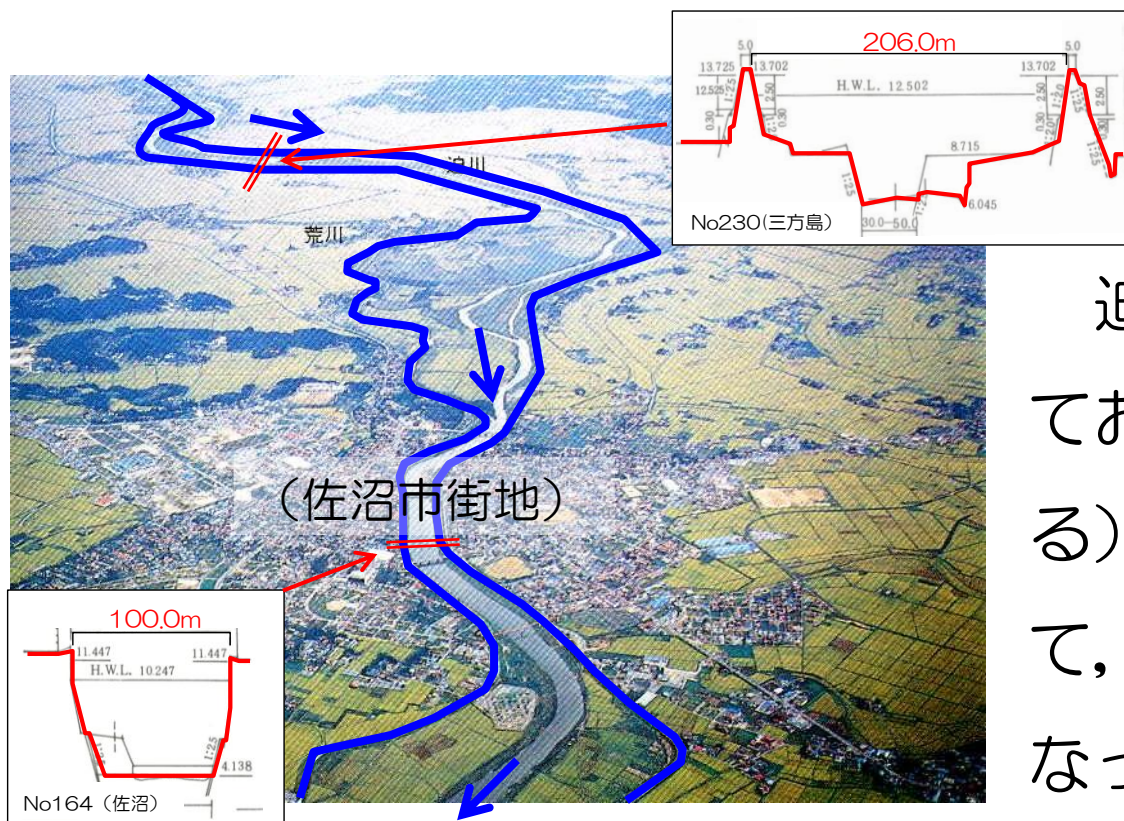
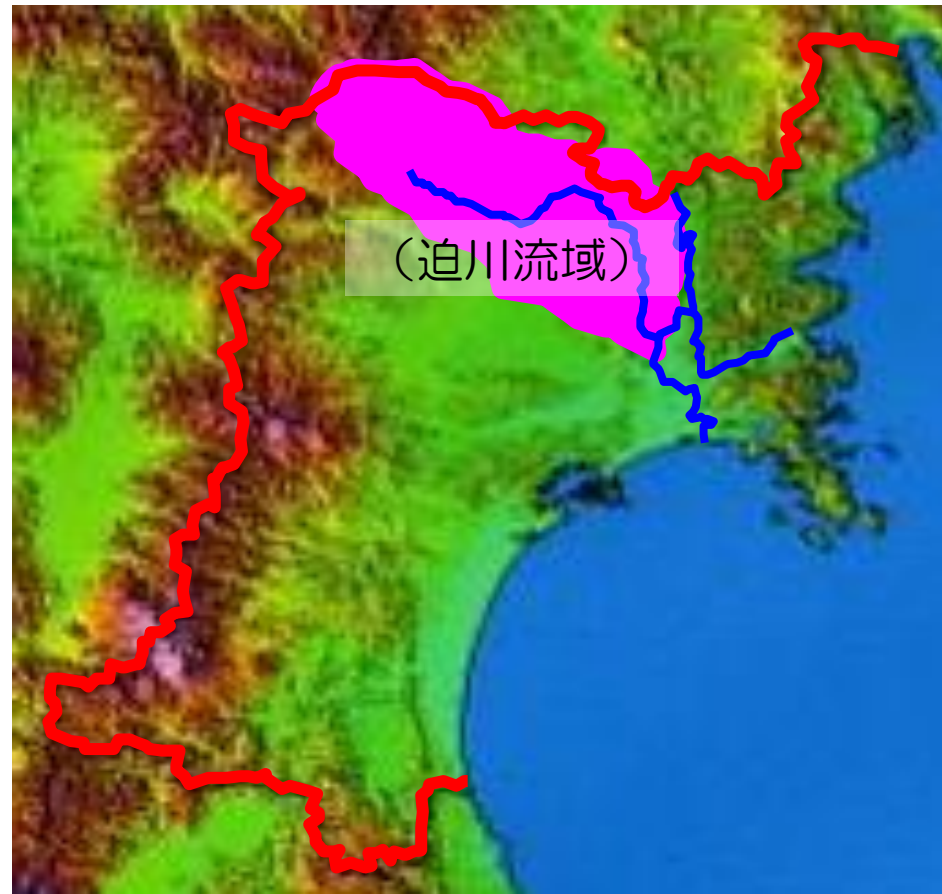
迫川流域の地形は、治水的に不利になりやすい特徴を持っています。
そのため、古くから流域の特性を踏まえた治水対策が行われてきました。

① 上流は雨の降りやすい地形

② 中・下流は勾配の緩い低平地を流れる

迫川は、県内でも雨の多い地域である栗駒山の東南斜面の雨水を集めて始まります。

中流から下流にかけては、1/4000といった極めて緩い勾配で、洪水が流下するのに時間を要する地形となっています。



③ 市街地が狭窄部になっている

迫川は、若柳と佐沼の市街地で狭窄しており（河川幅が上流より狭くなっている）、洪水時にはネックポイントとなって、市街地付近の水位が上昇しやすくなっています。

④ 旧北上川の背水の影響を受ける

⑤ 下流（旧北上川）の洪水受け入れ量に制限がある

迫川の中・下流域は極めて緩い勾配であるため、旧北上川が増水すると、旧北上川の洪水が迫川へ逆流します。

また、旧北上川下流の石巻市街地での洪水被害を防止するため、迫川から旧北上川への洪水流下量には制限があります。



北上川下流域や迫川流域は洪水の常襲地帯でした。慶長年間から昭和初期までの約350年間に75回もの洪水被害を受けたと伝えられています。

これらのことから、洪水被害の軽減と新田開発のために、江戸時代から延々と治水事業が行われてきました。

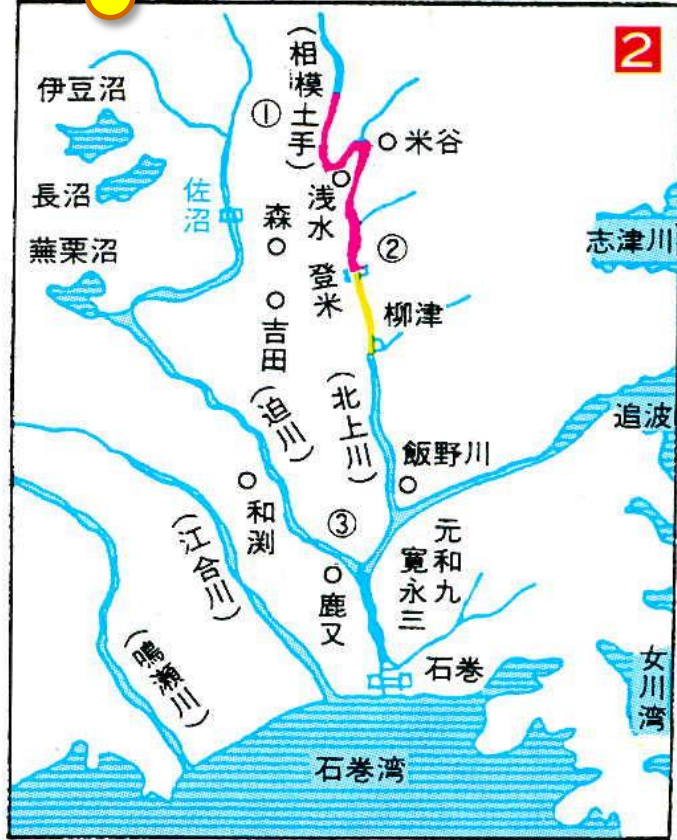
① 改修前の流路 (1604年以前)



①慶長9年までの流路図 (1604)
江合川は独立河川でした

江戸時代以前の北上川は、内陸の西側に大きく蛇行した後、追波湾に流れていました。

② 白石宗直の改修 (1605年~1610年)



①相模土手、安場の曲袋 慶長10年白石宗直による改修13年完成 (1605~1608)
②14年~15年登米~柳津間の改修 (1609~1610)
③迫川は独立河川になった。

伊達家臣の白石宗直により、北上川を二股川に導き、そのまま南流させる河川改修が行われました。これにより迫川は北上川と分離されました。

③ 川村孫兵衛の改修 (1616年~1622年)



①元和2年江合川と迫川を合流 (1616)(短台地峡の開削)
②元和3年~6年 (1617~1620) 柳津~猪岡短台開削
麻崎村小麻に締切堤防を築く
③神取山を迂回する河道の掘削 (人口狭窄部をつくる)
④河道拡幅工事 (元和7~8年) (1621~1622)

伊達家臣、川村孫兵衛は、柳津から神取までの河道を開削して北上川に迫川を合流させました。また、江合川も開削し和渕で合流させました。

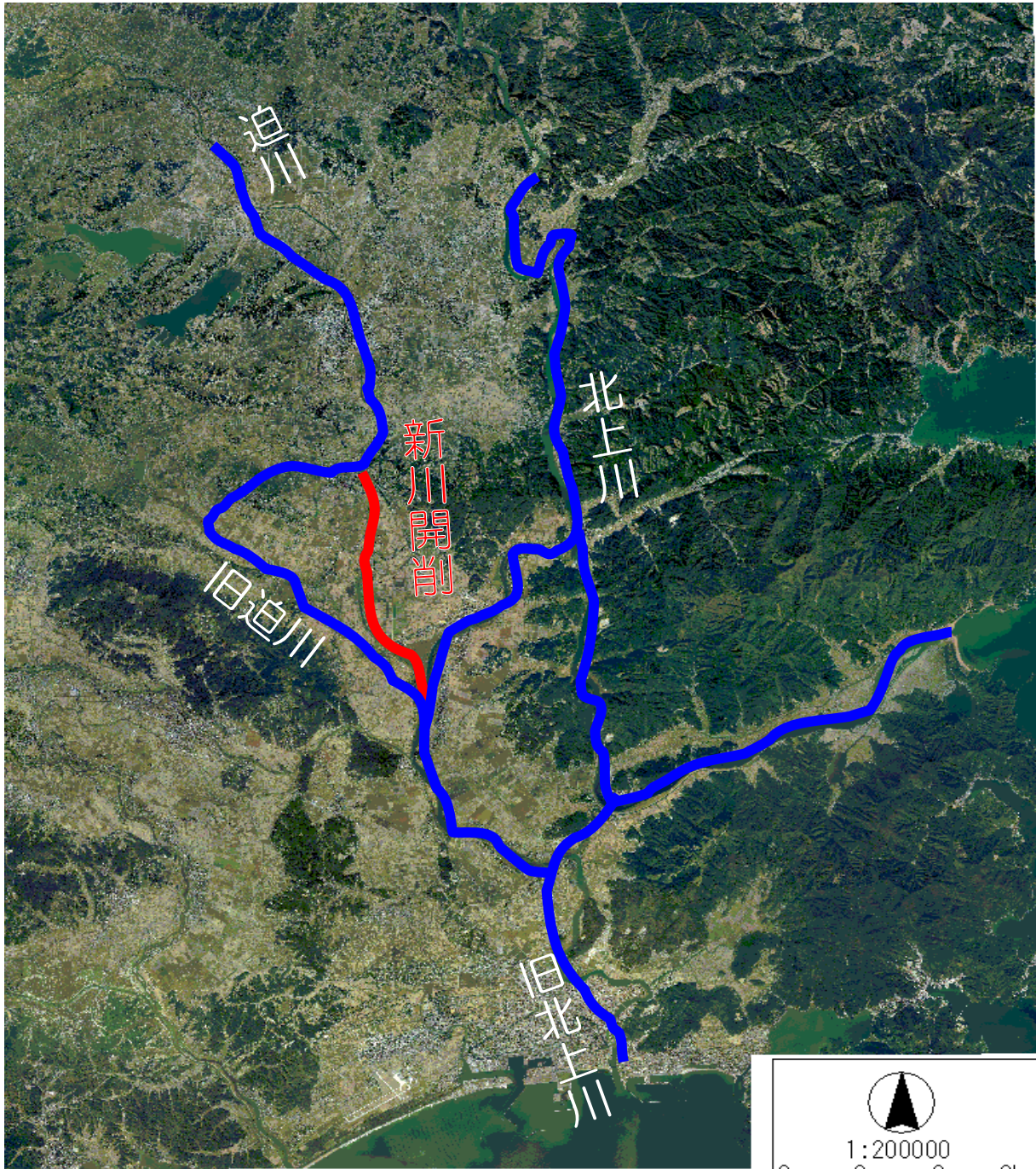
④ 近代以降の改修 (1623年~1939年)



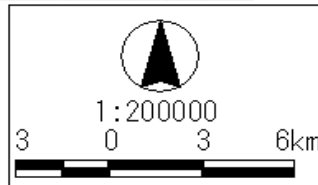
①元和9~寛永3年 (1623~1626) 第3次改修
②北上川開削 (明44~昭和9年) (1911~1934)
③迫川開削 (昭和7~昭和14年) (1932~1939)

新北上川が開削されるとともに、迫川と旧迫川が分離され、現在の流路がほぼ形作られました。

【出典：迫町史】



北上川下流域 空中写真



新北上川の開削工事により、迫川は北上川の増水による水害から解放されましたが、依然として沿川の洪水被害に悩まされていました。

このことから、県が改修計画を策定すると共に、地元の協力を得ることで、中小河川国庫補助制度による第1号河川として、迫川の大規模な河川改修工事が実施されました。



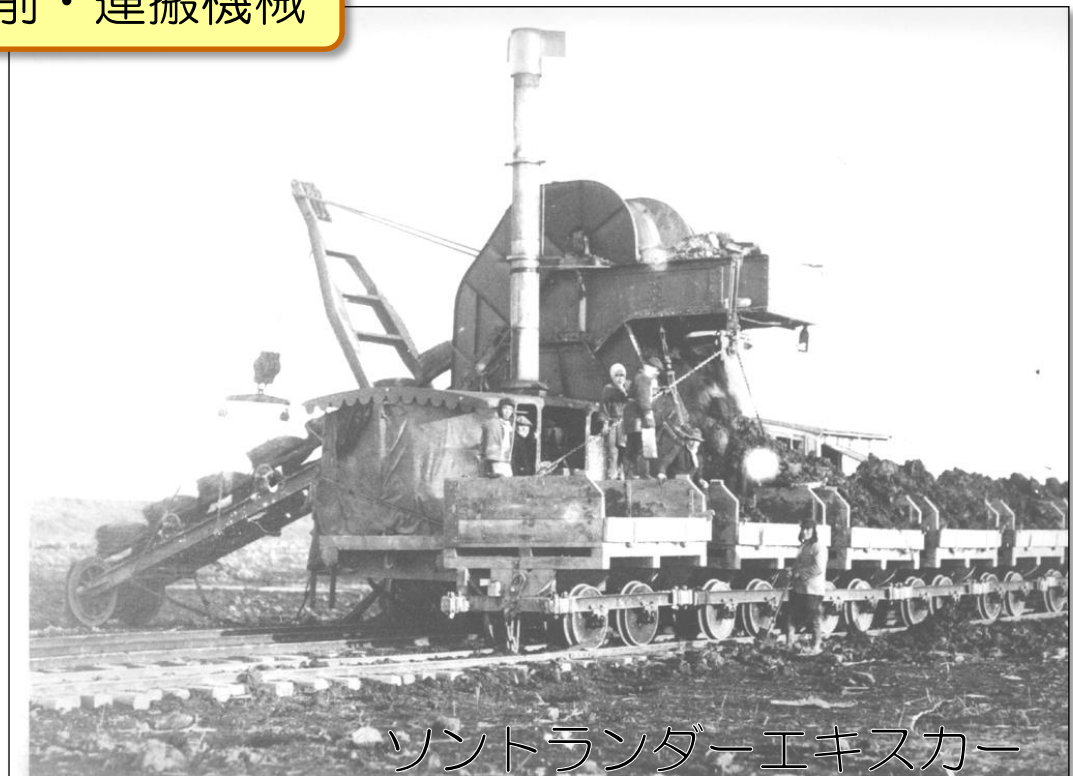
山吉田水門（昭和13年完成）

計画は、現在の登米市米山町山吉田地内に山吉田水門および洗堰を新設して迫川を分岐し、延長11.7kmの新川を開削するもので、昭和7年から14年までの8年間を要して完成しました。

昭和初期の掘削・運搬機械



スチームエンジン機関車（20t）



ソントランダーエクスカー

迫川の上流域には、多くのダムが建設されています。

ダムは、上水道や農業用水といった水資源の確保や、水力発電といった機能だけではなく、大雨時は洪水を調節して浸水被害を回避・低減し、渇水時には河川の瀬切れ（川が干上がること）を防止して環境を保全するなど、様々な役割を持っています。

花山ダム



- 目的：
洪水調節，上水道・農業用水補給，正常流量確保，発電（出力1,500kw）
- 型式：重力式コンクリートダム
- 堤高：48.5m
- 堤頂長：72.0m
- 流域面積：126.9km²
- 貯水池面積：2.4km²
- 総貯水容量：3,660万m³
- 完成：昭和32年度
（平成16年度再開発）
- 事業費：1,675百万円
（再開発：3,810百万円）

栗駒ダム



- 目的：
洪水調節，農業用水補給，発電（出力2,800kw）
- 型式：重力式コンクリートダム
- 堤高：57.2m
- 堤頂長：182.0m
- 流域面積：53.0km²
- 貯水池面積：0.83km²
- 総貯水容量：1,371.5万m³
- 完成：昭和36年度
- 事業費：1,618百万円

荒砥沢ダム



- 目的：
洪水調節，農業用水補給，
発電（出力1,000kW）
- 型式：中央コア型ロックフィルダム
- 堤高：74.4m
- 堤頂長：413.7m
- 流域面積：20.4km²
- 貯水池面積：0.76km²
- 総貯水容量：1,413万m³
- 完成：平成10年度
- 事業費：38,048百万円

小田ダム



- 目的：
洪水調節，農業用水補給
- 型式：中央コア型ロックフィルダム
- 堤高：43.5m
- 堤頂長：520.0m
- 流域面積：23.4km²
- 貯水池面積：0.81km²
- 総貯水容量：972万m³
- 完成：平成17年度
- 事業費：42,905百万円

治水は百年の計と言われますが，昭和22年のカスリン台風，昭和23年のアイオン台風と，相次ぐ台風来襲による未曾有の洪水を契機に策定された河川計画が，半世紀を超えてもなお，社会状況の変化に対応しながら着実に推進され，ダムが建設されてきたのです。

上流域のダムと併せて、迫川の中流域には遊水地も多く整備してきました。

遊水地とは、洪水時の流水を一時的に貯留させることで、下流の洪水流量

を低減させて被害を回避・低減する施設です。

南谷地遊水地



アイオン台風と昭和25年の豪雨災害を契機として計画された施設で、昭和33年度に完成しました。

120門の木製扉が、常時は重りにより閉扉していますが、洪水時は水圧で自動的に転倒して、洪水を流入させる構造になっています。

伊豆沼遊水地



伊豆沼は、2つの水門操作により、荒川と落堀川の洪水を貯留し、周辺の宅地や耕地を水害から守る遊水地として整備されています。

内沼とともに、夏には湖面一杯にハスが咲き、冬には多くの水鳥が越冬する湿地で、昭和60年にラムサール条約湿地に登録されています。

蕪栗沼遊水地



小山田川、瀬峰川、菅刈川の3川が合流する地点の蕪栗沼自然遊水地を活用して、周囲の水田を含めて整備を行い、平成13年3月に完成しました。

マガンなどの渡り鳥の越冬地となっており、周囲の水田とともに、平成17年にラムサール条約湿地に登録されています。

昭和50年に着工した長沼ダムが、平成25年度事業で完成を迎えます！

長沼ダムにより、洪水時の流量1,700m³のうち600m³を調節することで、

迫川下流域の治水安全度が一段と向上します。

現況写真（平成23年11月撮影）



完成イメージ図



- 目的：洪水調節，農業用水補給，漕艇競技コースの確保
- 型式：単一型アースフィルダム
- 堤高：15.3m
- 堤頂長：1,050m
- 流域面積：直接16.0km² 間接570.km²
- 貯水池面積：6.0km²
- 総貯水容量：3,180万m³